

ベンヤミンにおける潜在的なもの

平井 守

「潜在的 (virtuell)」という語は、ベンヤミンの著作¹⁾において、キーコンセプトのようなものとして用いられているわけではない。それゆえ、ベンヤミン研究において、これまであまり注目されてこなかった。しかし、たとえば、『ドイツ悲劇の根源』の「認識批判的序章」のなかでは、この「潜在的」という語が、少なくとも二度、重要な箇所では用いられている。後でとりあげることになるが、それらの「潜在的」という語に言及した数少ない最近の研究例として、日本のドゥルーズ研究者である檜垣立哉の2009年の論文「記憶の実在—ベルクソンとベンヤミン—」と、2010年の著作『瞬間と永遠—ジル・ドゥルーズの時間論—』²⁾、ならびに、米国の哲学者、批評家であるサミュエル・ウェーバーの2008年の著作《Benjamin's *abilities*》³⁾を挙げることができる。

この「潜在的」という語は、一般的には、「潜在する」、「潜勢の」という意味をもつと同時に、「現実の (reell)」の対立語として、「仮の」、「仮想の」、「ヴァーチャルの」という意味でも用いられる。フランスの哲学者ピエール・レヴィによると、「潜在的 (virtual)」という言葉は、中世のラテン語の *virtualis* に由来しており、さらに、それ自身は、「力 (strength)」ないし「能力 (power)」を意味する *virtus* に由来する⁴⁾。

そして、ベルクソンとドゥルーズによって、この「潜在的」という語に、重要な哲学的意味が付与されることになる。「潜在的なもの (le virtuel)」は、ドゥルーズ哲学の中心的なキーワードの一つであり、さらに、その源泉は、ベルクソンの哲学にまで遡ることができるのである。ドゥルーズは、その著作『差異と反復』のなかで、「可能的なもの (das Mögliche)」と「潜在的なもの (das Virtuelle)」とを明確に区別している。「可能的なもの」は、「実在的なもの」に対立し、そのプロセスは、「実在化」である。いっぽう、「潜在的なもの」は、「アクチュアルなもの」に対置されるべきものであり、そのプロセスは、「現実化」である。ドゥルーズは次のように述べている。「潜在的なもの (das Virtuelle) は、実在的なもの (das Reale) には対立せず、

ただアクチュアルなもの (das Aktuelle) に対立するだけである。潜在的なものは、潜在的なものであるかぎりにおいて十全な実在性 (Realität) を保持しているのである。」⁵⁾

さらに、このような定義は、「共鳴の諸状態 (Resonanzzustände)」について語ったプルーストの「実在的ではあるがアクチュアルではなく、観念的ではあるが抽象的ではない (real ohne aktuell zu sein, ideal ohne abstrakt zu sein)」⁶⁾ という定義と不二のものであることが、ドゥルーズ自身によって主張されている。言うまでもなく、ベンヤミンにとっても、その作品の翻訳を彼自身が手がけ、また論考(「プルーストのイメージについて」)を捧げているプルーストは、最も重要な作家である。

ベンヤミンにおける「潜在的なもの」は、ドゥルーズの「潜在的なもの」と、どのような共通性を有しているのだろうか。そして、「イメージ」、「記憶」、「歴史」などをめぐるベンヤミンの思想の全体において、「潜在的なもの」は、いかなる役割をはたしているのだろうか。

* * *

『ドイツ悲劇の根源』の「認識批判的序章」は、ベンヤミンにとって、哲学的批評の方法論という意味合いをもっている。哲学的方法としての「真理の叙述」をめぐって、「理念」、「概念」、「現象」という三者の関係が問題にされる。ベンヤミンにとって、真理は、「自己を叙述するもの」である。この「自己を叙述するもの」としての真理が、いかに「哲学者」によって「叙述」されるかが、ここでの問題の中心である。

ベンヤミンは、「真理は叙述 (darstellen) された諸理念 (Ideen) の輪舞のなかに顕現する」(B, I-1, 209) と説明する。理念は、「所与」のものであり、「存在」である。いっぽう、「諸現象 (Phänomene)」は、「仮象 (Schein) が混じり込んでいる粗雑で経験的な (empirisch) 状態」(B, I-1, 213) におかれている。したがって理念の領域と、現象の領域は、さしあたって隔絶している。ベンヤミンによれば、それゆえ、「諸概念 (Begriffe)」の働きは、諸現象を「諸要素 (Elemente)」にいったん「分割」し、含まれていた経験的なものを消去し、そのうえで、諸要素が「諸理念」の領域へと入って行くことを可能にすることである。その際、諸現象は、「偽りの統一」が破壊されて、諸要素という形で、諸理念から構成される「真理の真の統一」

に参与しうるようになる。ベンヤミンは、このような概念の働きのなかで、「理念による現象の救出が遂行されると同時に、経験を手段にする理念の叙述が遂行される」(B, I-1, 214)と述べている。

こうした「叙述」をめぐる理論の核心部分をなすのが、「星座(Konfiguration / Konstellation)」(B, I-1, 214 / 215)としての「理念論」である。ベンヤミンは、理念と諸現象との関係をあらわすために、「代表すること(Repräsentation)」という語を用いている。そして、理念と諸現象の代表関係は、星座と星の关系到等しいと、ベンヤミンは述べている。その際に、「潜在的(virtuell)」という語が、ベンヤミンによって用いられるのである。

ベンヤミンは、次のように述べている。「理念それぞれは、諸現象の客観的な(objektiv)潜在的(virtuell)配置(Anordnung)であり、諸現象の客観的な解釈(Interpretation)である。」(B, I-1, 214)上からの真理の自己叙述と、下からの叙述の出会い場が、星座という比喻で呼ばれている。その二つの叙述の一致が、「客観的」であるとされているのである。したがって、哲学の課題は、真理の自己叙述を、理念と諸現象の代表関係を、星座と星の関係として、客観的な潜在的配置、客観的な解釈として、叙述することであると言うことができる。さらに、「潜在的」という語に注目すれば、ベンヤミンにとって、理念とは、諸現象の「客観的」ではあるが「潜在的」な「配置」(それが同時に「解釈」でもある)である。ここで、ベルクソンならびにドゥルーズのターミノロジーを援用するならば、それは、「潜在的なもの」として、「実在的」ではあるが、「アクチュアルな」ものではないと言ってよいだろう。また、「配置」という語に注目すれば、理念のこの「星座」は、ある「配置」として、すなわち一種の「異質混交」の構造として、おなじくベルクソンならびにドゥルーズのターミノロジーを再び援用するならば、「多様体(Mannigfaltigkeit = multiplicité)」として考えられていると言うことができるのではないだろうか。檜垣立哉は、先に挙げた著作のなかで、「〈星座〉としての〈理念〉を論じ、そのモザイク的な断片性を述べるこの部分は、同様にカント的な〈理念〉の存立を潜在性の多様体に重ねあわせて展開する『差異と反復』でのドゥルーズの議論と、きわめて似通った発想に基づいている」⁷⁾と指摘している。先どりして言えば、この「潜在性の多様体」は、ベルクソンとドゥルーズのみならず、ベンヤミンにとってもまず第一には、「潜在的な過去」の実在であった。

* * *

「認識批判的序章」における論述をさらにたどっていくと、「根源の学としての哲学史」ということが述べられている。その際、もう一度、同じ「潜在的」という語にぶつかる。ベンヤミンは、「根源の学としての哲学史は、およそ突飛なもの、一見展開の過剰と思われるものから理念の星座を浮かび上がらせる形式である。そうしたそれぞれの極点にたって対立し合うものらが意味深く並存することができる、ということの特徴とする総体性、それが理念なのだ」(B, I-1, 227)と述べている。そのような理念の叙述の前提となるのは、「理念の中に含まれる極端なものの分布圏域が潜在的に(virtuell)踏査され(abschreiten)て」いることである。そして、「この踏査はあくまで潜在的な(virtuell)ものにとどまる」とも言う。さらに、ベンヤミンは、「本質をなす存在に関係づけられているというという意味によってこそ、歴史とはこの存在の前史と後史である」(B, I-1, 227)と述べている。そして「そのような本質的な存在を宿しているものの前史および後史は、純粋な歴史ではなく、自然的な歴史(natürliche Geschichte)である」(B, I-1, 227)とも言う。そのうえで、「自然史的な、前史および後史のありようは、潜在的(virtuell)である」(B, I-1, 227)と、「潜在的」という語が、最後に、もう一度用いられる。

ある本質をなす存在のもつ潜在的な可能性が、前史と後史である。それは、未来と過去へむかう歴史的な「パースペクティブ」にほかならない。それは、本質と関係を持ち続ける限りにおいて、果てしなく「深化」させていくことが可能である。それら潜在的なものの領域の全体が、ここで「総体性」と呼ばれているのである。そのような潜在的なものの領域に深く潜行し、その総体性をくまなく踏査することによって、逆説的に、本質をなす存在、すなわち「理念」を浮かび上がらせるというのが、ベンヤミンの基本的な戦略である。

ベンヤミンにおける潜在的なものの領域は、原理的には、通時的にも共時的にも、すべてに及ぶ。そうしたものを、ベンヤミンは、「自然史」と呼んだのである。では、潜在的である自然史とは、何か。この点でも、檜垣立哉は、その論文の中で、ベンヤミンの晩年の著作「歴史の概念について」における「静止状態の弁証法」の議論をひきあいにしつつ、ベンヤミンとベルクソンの比較可能性を指摘している。檜垣は、両者の、「歴史

的時間を考えるその視点は、創造にまつわる自然史総体を遠望し、なおかつ現在という時間性をその縮約として把握しようと試みるものである⁸⁾と述べている。とするならば、ベンヤミンにおける潜在的なものは、ベルクソン、ドゥルーズにおける潜在的なものである「過去」の实在、「純粹記憶」、あるいは「持続」といったこととの連関が、まさに問われるべきものであると言わねばならない。

* * *

初期ベンヤミンの論考のひとつに、「フリードリヒ・ヘルダーリンの二つの詩作品」と題された文章がある。そのなかで、ベンヤミンは、「詩作品 (Gedicht)」とは区別される「詩作されてあるもの (das Gedichtete)」という概念を提起している。ベンヤミンは、それが、「詩作品の課題」を意味するひとつの「境界概念」であると述べている。そして、そこでの論述のなかで、「潜勢的 (potentiell)」という語が、「現実的 (aktuell)」の対義語として出てくる。

ベンヤミンによれば、「詩作されてあるもの」は、「詩作品」より大きな「規定可能性 (Bestimmbarkeit)」を持っている。しかし、それは、「詩作されてあるもの」に、「規定 (Bestimmung)」が量的により少ないから、あるいは、新たな規定を受け入れる余地がより多いからというわけではない。ベンヤミンは次のように述べている。「詩作品のなかに、現実的に (aktuell) 存在 (vorhanden) して (詩作品の表現形式を定めて) いる諸規定も、他の諸規定も (anderer) (詩作されてあるもののなかでは)、潜勢的な (potentiell) ありよう (Dasein) をしているからである。」(B, II-1, 106)

サミュエル・ウェーバーは、前述の著作の中で、この箇所をとりあげ、つぎのようにパラフレーズしている。「詩作されてあるもの (the poetized) は、詩作品 (poem) よりも少ない規定をもっているように見える。しかし、そのようなより少ない規定 (determination) で、それにもかかわらず、より大きな規定可能性 (determinability) に寄与するのである」、このようなことが可能であるのは、「詩作品の中で現実的に存在する (actually present) 規定の潜勢的なありよう (potential existence) によって構成されている詩作されてあるものにおける可能性 (possibility) の優位によるのである」、そして、「詩作されてあるものの潜勢的な (potential) 規定可能

性は、たんに詩作品のなかに現実的に存在する規定だけではなく、同様に他のもの (others) も潜在化 (virtualize) しているのである。」⁹⁾

ウェーバーによるパラフレーズは、さらに次のように続いている。「詩作されてあるもののより大きな規定可能性は、第一に、詩作品の中で現実的に存在する規定を、そのような規定を可能的なもの (possible)、潜勢的なもの (potential)、そしておそらく潜在的なもの (virtual) に変えるひとつのテキストへと書き換えるという事実、その本質がある。」しかし、「そのように規定を規定可能性として潜勢化 (potentializing) し、潜在化 (virtualizing) することにおいて、詩作されてあるものは、詩作品のなかに現実的に存在する規定だけに自己を単純に限定することはできない。それはまた、他のもの (anderer) を考慮にいれなければならないのである。」¹⁰⁾そして、ウェーバーにしたがえば、結局のところ、ベンヤミンは、この「他のもの」が、いったい何であるのかは、少なくともこの箇所では、明らかにしていないという。

とはいえ、潜在的なものには、現実化されない「他のもの」が、潜在化されていることが、ともかくもここでベンヤミンによって述べられているということは確かである。そして、これが、現実化された詩作品にくらべ、潜在的な「詩作されてあるもの」の方がより大きな規定の「可能性」をもつ理由なのである。

ところで、ここで、ウェーバーが、ベンヤミンの論述に密着しながら何とかとりだそうと苦心しているある種の論理には、現代イタリアの思想家であるジョルジョ・アガンベンが、論文「思考の潜勢力」¹¹⁾のなかで、アリストテレスにおける「現勢態 (energeia)」と「潜勢態 (dynamis)」との関係を解釈してとりだしてくる論理とよく似たものを見出すことができる。ドイツの研究者であるエファ・ゴイレンは、アガンベンについての入門書のなかで、次のような説明を行っている。アガンベンのこの解釈の前提をなすのは、「アリストテレスにとって、潜勢態 (何かを行うことができる = dynamia) とは、それを (即座には) 行わない (= adynamia) という可能性をたえず含んでいるものでなければならなかったという点である。」¹²⁾アガンベン自身の叙述によれば、「非の潜勢力 (adynamia)」は、あらゆる潜勢力の欠如をではなく、「現勢力にならない潜勢力 (dynamis me energein)」を意味する。すなわち、「〈非能力〉は〈能力〉の反対なのではない」ということなのであり、「ある行為が実現される場合にも、それは、

何かをしないという能力なしには果たされないから、〈非能力〉というのは、ある固有の力をもっているのであり、その力そのものである。」¹³⁾ここでアガンベンによって述べられていることは、冒頭で触れた「潜在的 (virtuell)」という語の語源が「力」ないし「能力」を意味する *virtus* であることとうまく符号する。

さらに、ゴイレンは、同書の注のなかで、現代ドイツの哲学者であるヴェルナー・ハーマッハーのベンヤミン論《*Affirmativ, Streik*》をとりあげ、次のように述べている。「ヴェルナー・ハーマッハーもヴァルター・ベンヤミンの『暴力批判論』を再構成的に読解する際に〈超—形成的 (afformativ)〉という表現を使って〈させる〉という先行構造の意味を、アガンベンが現勢力と潜勢力という論理のカテゴリーについて解釈し直したのと似たような仕方で仕上げた。」¹⁴⁾日本語版の訳者による補足によれば、「この〈超—形成的である (afformativ)〉は、ハーマッハー自身の説明によれば、たんなる〈非—形成的である (aformativ)〉とは違って、形成的なものの否定という意味ではない。それは、可能にしうるのか、そうでないのか、行為なのか、それとも非行為なのか、といった二項対立の形式では説明できないある可能性実現のあり方を指している。」¹⁵⁾ここで言われる「可能性実現」のあり方とは、われわれの文脈で言いかえれば、「潜在的なもの」の「現実化」のあり方である。

ここまで、ベンヤミンの著作において、「潜在的」ならびにそれにほぼ匹敵する「潜勢的」という語があらわれる数少ないとはいえ重要な箇所例を見てきたが、その際、表面上は、いずれもふつうの形容詞もしくは副詞として用いられており、ことさら目立った使われ方がなされているわけではない。しかし、そこには、ウェーバーやハーマッハーがとりだそうと試みているようなある共通する思考の論理が、背後に隠れているのではないだろうか。そして、それは、ベンヤミンのほとんどすべての著作に通底するような性質のものではないだろうか。ベンヤミンの著作のどうしようもないあるわかりにくさは、そのような論理のあり方に起因している。そして、その論理は、ベンヤミン自身によっては決して全面的に展開されることのなかった「潜在的なもの」、あるいは「潜勢的のもの」、あるいは「可能的なもの」という概念と、深く関わっているのではないだろうか。

* * *

いくつかの著作に跨って現れるあるひとつの形象は、「潜在的」という語こそ付加されていないが、ベンヤミンにおける「潜在的なもの」のゆくえを示唆しているように思われる。それは、『一九〇〇年頃のベルリンの幼年時代』、「フランツ・カフカ論」、「歴史の概念について」のなかでくりかえし現れる「せむしの小人 (das bucklichte Männlein)」という形象である。それらのうち、ここでは、『一九〇〇年頃のベルリンの幼年時代』のみを取りあげるが、そこでは、「せむしの小人」は、「想起と忘却」の問題に結びつけられる。「せむしの小人」は、潜在的なものとしての過去のいわば管理者のような存在である。ベンヤミンは次のように語っている。「彼、この陰気な代官は、私が手に入れたものすべてのうちの半分、忘却という半分を取り立てること以外に、私には何もしなかった。」(B, IV-1, 303) さらに続けて、死の直前に生じるフラッシュバック現象のことが語られる。「死に瀕した者の眼前をその〈全生涯〉が通り過ぎていく、と人びとは噂しあっているが、私の思うに、この〈全生涯〉は、小人が私たち誰もについて持っているような像の数々から成り立っている。それらの像が、いまの映写機の前身だった堅くきちっと製本された小型本のあのページのように、さっと矢のように通り過ぎていくのだ。この本の小口のところ親指を当て、軽く押さえつけながら滑らせていくと、互いにほとんど違わない像を、瞬間ごとにつぎつぎ目にするのができた。そうした像が迅速に流れることによって、リング上のボクサーや、波と戦っている泳者の動きが分かるというわけだった。あの小人は私についても、そのような像をもっているのである。」(B, IV-1, 303)

興味深いことにベルクソンもまた、ある講演の文章のなかで、これと同じ現象をとりあげている。ベルクソンは、次のように語っている。「多くの事実によって、過去はその最もこまかな点まで保存され、本当の忘却はないことが示されているように見えます。みなさんは溺れたり首つりをしたひとが、生き返ったときに、一瞬のあいだに自分の過去のすべてをパノラマのように見たと語るのを聞かれたことがあるでしょう。」さらに、その少し後で、「過去がパノラマのように見えるのは、すぐに死ぬのだという突然の確信から生じた、突如とした生への無関心のためです。」¹⁶⁾ベルクソンにおいて、過去とは、潜在的ではあるけれども即自的な実在であり、それは、決して失われることはなく、現在時と共存する。死を目前にした者には、現在における緊張がもはやその意味を失うので、そのことによ

て潜在的だった全過去が一挙に放出されてしまうのである。とすれば、ベンヤミンの「せむしの小人」は、そのような潜在的な過去を、われわれの死の時まで預かってくれる存在なのである。

フランス近現代思想史の研究者である赤間啓之は、ドゥルーズによるベルクソン解釈が、「可能的なもの (le possible)」から「潜在的なもの (le virtuel)」を区別し、「差異」の「創造」そのものである「潜在的なもの」のみを、一方的に称揚していることに異議を差し挟んでいる。赤間は、ベルクソンにおける「可能的なもの」と「潜在的なもの」との混用を指摘する。赤間によれば、「潜在的なもの」もまた、結局は、「可能的なもの」と同様に、現在の「萌芽」を、過去に「遡及的」に見出す「一種の結果論」に依拠しているのである。そのうえで、それでもなお、両者の一応の区別が試みられる。赤間によれば、「可能的なもの」とは、「現在の点から過去の中の同水準の一点へと一直線に繋ぐ光線のベクトルに擬せられる。だがそれだけにその光線は紡錘形に拡散することはなく、したがって過去のある程度の拡がりを覆うこともない。」いっぽう、「潜在的なもの」とは、「過去の記憶のすべてが余さず保存され、そのため可能世界というかたちでの切り分けを受け入れない巨大なトポスのことである。」¹⁷⁾とはいえ、赤間は次のようにも言う。「未来の歴史家たちがわれわれの現在の時点で忘れ去られた奇妙な宗教的政治運動に、(未来のユートピアの……筆者による補足) その萌芽状態を見出すといった未来の可能性をわれわれは否定できないだろう。その場合でも歴史の舞台から消えた彼ら、消えたとは言わないまでも忘れられた人々にとっての救いとは、彼らが予見した、少なくとも関わったものとしての未来が、必ずやそうした〈現在〉の帳簿のどこかに書き込まれているはずだという潜在性だけである。言い換えれば、滅亡したもの、潰えきったもの、現在に影響を残せなかったものに思いやることこそ、ベルクソンによって批判された〈可能的なもの〉の本当の存在意義なのである。」¹⁸⁾

赤間のこの文章は、もちろん、ベンヤミンと無関係に述べられたものである。しかし、ベンヤミンの「想起 (Erinnerung)」もまた、過去に現在の萌芽を見出すという点では、軌を一にしている。それでは、ベンヤミンにおいて見出されるべきは、「潜在的なもの」と呼ぶべきであろうか、それとも、「可能的なもの」と呼ぶべきであろうか。ドイツの文学研究者であるペーター・ソンディーは、プルーストの「無意志的記憶 (mémoire

involontaire)」と、ベンヤミンの「想起」とを比較して、次のようなことを述べている。「プルーストが耳を傾けるのは、過去が後の世へと鳴り響かせている〈余韻 (Nachklang)〉にである。ベンヤミンの方は、そうしているうちにもそれ自体過去へとなりおおせてしまった未来が、前の世へと鳴り響かせているいわば〈予韻 (Vorklang)〉に耳を傾けるのである。」¹⁹⁾さらに、ソンドイーに従えば、プルーストが「失われた時」を求めるのは、過去と現在との符号において、「時」から逃れるため、とりわけ未来、究極には、死から逃れるためである。これに対し、ベンヤミンが「失われた時」を求めるのは、「失われた未来を求めることだった。」ソンドイーは、『ベルリンの幼年時代』におけるベンヤミンの試みについて、「彼が追想において帰還しようとしている場所はほとんどどれも〈来るべきものの相貌のあれこれ〉を備えている。彼の回想が幼年時代の形姿に向けられるのが〈未来のことを預言する見者の勤めにおいて〉であることは偶然などではない」²⁰⁾と述べている。

ベンヤミンにおいて、「潜在的なもの」があるとしたら、それはむしろ「可能的なもの」と呼ぶべきものかもしれない。ベンヤミンにおける、想起されるべき過去は、来るべき未来の萌芽としての過去である。しかし、現実化した未来の萌芽であると同時に、現実化しなかった未来の萌芽でもある。その過去は閉じたものではなく、開かれている。しかも、たんに現実化した未来に開かれているというだけではない。その未来は、現実となった未来だけではなく、現実にはならなかったもうひとつの、あるいは多数の未来をも、「潜在的」に含んでいるのである。そのような現実化しなかった未来の萌芽としての過去のありようが、ベンヤミンにとっての「潜在的なもの」、あるいは「可能的なもの」であると言いうことができるのではないだろうか。

〔付記：本稿は、ベンヤミンの哲学的批評の方法論として〈モノドロジー〉を扱った拙論「ベンヤミンのモノドロジー (その1)」(『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集 第12号』(2011年3月発行)所収)を補足すると同時に、ベンヤミンの〈モノドロジー的実践〉を扱う今後執筆予定の「ベンヤミンのモノドロジー (その2)」への橋渡しの役割をはたすことを、意図して書かれたものである。〕

注

- 1) ベンヤミンのテキストとして、*Walter Benjamin Gesammelte Schriften*. Hrsg. v. Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1991 を使用。本文中では、B, 巻数および分冊数, 頁数で示した。引用に用いた訳文は、ヴァルター・ベンヤミン (浅井健二郎訳) 『ドイツ悲劇の根源 上・下』(ちくま学芸文庫、1999年)、ヴァルター・ベンヤミン (浅井健二郎訳) 『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』(ちくま学芸文庫、2001年)、およびヴァルター・ベンヤミン (浅井健二郎編訳、久保哲司訳) 『ベンヤミン・コレクション3 記憶への旅』(ちくま学芸文庫、1997年) によった。ただし、以下において、訳および句読点等を、筆者の判断で変更した部分のごく少数ながらある。また引用文中の括弧は、訳者による補足を表しており、訳とあわせて利用させて頂いた。
- 2) 檜垣立哉「記憶の実在—バルクソンとベンヤミン—」〔『思想2009年12月号』(岩波書店) 所収〕、および檜垣立哉『瞬間と永遠—ジル・ドゥルーズの時間論—』(岩波書店、2010年)。
- 3) Samuel Weber: *Benjamin's -abilities*. Cambridge / London (Harvard University Press) 2008.
- 4) Pierre Levy: *Becoming Virtual Reality in the Digital Age*. Translated from the French by Robert Bononno. New York / London (Plenum) 1998, pp. 23–24. 邦訳ピエール・レヴィ (米山優訳) 『ヴァーチャルとは何か』(昭和堂、2006年)、2頁。
- 5) Gilles Deleuze: *Differenz und Wiederholung*. Aus dem Französischen von Joseph Vogl. München (Wilhelm Fink) 2007, S. 264. 引用は、邦訳ジル・ドゥルーズ (財津理訳) 『差異と反復 下』(河出文庫、2007年)、111頁によった。
- 6) 前掲箇所。
- 7) 檜垣前掲書『瞬間と永遠』、122頁。
- 8) 檜垣前掲論文「記憶の実在」、62頁。
- 9) Samuel Weber 前掲書、p.17.
- 10) Samuel Weber 前掲書、p.18.
- 11) Giorgio Agamben: *Potentialities: Collected Essays in Philosophy*. Edited and translated by Daniel Heller-Roezen. Stanford (Stanford University Press) 1999, pp. 177–184. 邦訳ジョルジョ・アガンベン (高桑和巳訳) 『思考の潜勢力 論文と講演』(月曜社、2009年)、332–351頁。ただし、イタリア語版の翻訳である日本語訳と、ダニエル・ヘラー・レーゼンによって編集・翻訳された英語版とは異同が少なくない。ここでは、引用は邦訳にしたがった。
- 12) Eva Geulen: *Giorgio Agamben zur Einführung*. Hamburg (Junius Verlag) 2009, S.

46. 引用は、邦訳エファ・ゴイレン（岩崎稔、大澤俊朗訳）『アガンベン入門』（岩波書店、2010年）、51頁によった。
- 13) アガンベン前掲書、342頁。
- 14) ゴイレン前掲書、212頁。また、そこでゴイレンによって取りあげられているハーマツハーの論文は、Werner Hamacher: *Affirmativ, Streik*. In: *Was heißt Darstellen?* Hg.v. Christiaan L. Hart-Nibbrig. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1994, S. 340–370.
- 15) ゴイレン前掲箇所。
- 16) Henri Bergson: *Mind-Energy, Lectures and Essays*. Translated from the French by Herbert Wildon Carr. New York (Henry Holt and Company) 1920, pp. 94–95. 引用は、邦訳アンリ・ベルクソン（宇波彰訳）『精神のエネルギー』（第三文明社、1992年）、93–94頁によった。なお、引用した箇所の存在については、後出の赤間論文によって知識を得た。
- 17) 赤間啓之「ラン・ウィズ・ア・《ベルクソン》——あるいは〈可能的なもの〉と〈潜在的なもの〉」（『現代思想 9月臨時増刊 総特集ベルクソン』、青土社、1994年所収、26–65頁）。引用箇所は、32頁。
- 18) 前掲論文、33頁。
- 19) Peter Szondi: *Hoffnung im Vergangenen. Über Walter Benjamin*. In: Peter Szondi: *Schriften II*. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1978, S. 285f.、引用は、邦訳ペーター・ゾンディ（初見基訳）「希望は過ぎ去りしものうちに——ヴァルター・ベンヤミンと〈失われたとき〉」、『みすず 1989年4月号 (no.338)』（みすず書房）所収、14–30頁によった。引用箇所は、23頁。
- 20) 前掲箇所。